Ⓜ

国　　語

（200点
　80分）

注　意　事　項

1　**試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。**

2　この問題冊子は，45ページあります。問題は4問あり，第1問，第2問は「近代以降の文章」，第3問は「古文」，第4問は「漢文」の問題です。

　なお，大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも，試験時間は80分です。

3　試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を挙げて監督者に知らせなさい。

4　**解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので，監督者の指示に従って，それぞれ正しく記入し，マークしなさい。**

①　**受験番号欄**

　受験番号(数字及び英字)を**記入**し，さらにその下のマーク欄に**マーク**しなさい。**正しくマークされていない場合は，採点できないことがあります。**

②　**氏名欄，試験場コード欄**

　氏名・フリガナ及び**試験場コード**(数字)を**記入**しなさい。

5　解答は，解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば，[10] と表示のある問いに対して③と解答する場合は，次の(例)のように**解答番号 10 の解答欄**の③に**マーク**しなさい。

(例)

解答番号	解　答　欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

6　問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけません。

7　試験終了後，問題冊子は持ち帰りなさい。

国語

（解答番号 1 ～ 36）

第1問　次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えよ。（配点　50）

私の住む東京都品川区の旗の台の近辺では子どもたちが普通の隠れん坊をすることはほとんどない。そのかわりに変型した隠れん坊はしばしばおこなわれている。商店街の裏手の入り組んだ路地や、整地中の小工場の跡地や、まだ人の入っていない建て売り住宅の周りや、周囲のビルに押しつぶされそうな小公園で、子どもたちの呼び方では「複数オニ」とか「陣オニ」といった隠れん坊の変り種が生き延びている。その変り種のなかでも、かんけり（注1）は子どもたちに好まれている。

「複数オニ」とは、その呼び名のとおり、見つかった者すべてが見つかった時点でオニに転じて、複数のオニが残りの隠れている子どもを探す隠れん坊である。

「陣オニ」の場合は、立木でも塀の一部でもよい、オニが決めた「陣」にオニより早くタッチすればオニになることから免れる。ただし、かんけりと違って、助かるのは陣にタッチした本人だけである。

子どもたちが集まって何かして**a**遊ぼうとするときに、隠れん坊をしないで「複数オニ」や「陣オニ」をすることには見過ごし難い意味がありそうだ。隠れん坊は、藤田省三（注2）が「或る喪失の経験——隠れん坊の精神史——」という論文（『精神史的考察』平凡社、一九八二年、所収）で述べたように、人生の旅を凝縮して型取りした身体ゲームである。オニはひとり荒野を彷徨し、隠れる側はどこかに「籠る」という対照的な構図はあるけれども、いずれも同じ社会から引き離される経験であり、オニは隠れていた者を見つけることによって仲間のいる社会に復帰し、隠れた者もオニに見つけてもらうことによって擬似的な死の世界から蘇生して社会に戻ることができる。隠れん坊が子どもの遊びの世界から消えることは、子どもたちが相互に役割を演じ遊ぶことによって自他を再生させつつ社会に復帰する演習の経験を失うということである。

A たしかに「複数オニ」や「陣オニ」はおこなわれているけれども、それらはもはや普通の隠れん坊の退屈さを救うためにアクセントをつけた、といったていどのことではない。

b小学六年生の男の子から聞いた話を翻案すれば、「複数オニ」の演習の主題は裏切りである。オニが目をつぶってかぞえて

いる間に子どもたちはいっせいに逃げる。それぞれ隠れ場所を工夫しても、同じ方向に逃げれば、近くにいる者同士は互いにどの辺に隠れているかを知っている。そのとき一方が見つかれば即座にオニという名のスパイに変じて、寸秒前に仲間だった者の隠れ家をあばくことになる。近くに隠れた者との仲間意識は裏切り・裏切られる(ア)コウジョウ的な不安によって脅かされている。連帯と裏切りとの相互(イ)ヘンカンが半所属の不安を産み出し、その不安を抑えこもうとして、裏切り者の残党狩りはいっそう苛酷(かこく)なものになる。オニは聖なる媒介者であることをやめて秘密警察に転じ、隠れる側も一人ひとりが癒(いや)し難い離隔を深めつつ、仲間にスパイを抱えた逃亡者集団と化す。

「陣オニ」について、さきほどの少年は「自分だけ助かればよい」ゲームだという。「陣オニ」の本質をいいつくした説明であろう。「陣」になる木や石は、元来呪的(じゅてき)(注3)な意味をもち、集団を成り立たせる中心であった。だが今日子どもたちのおこなう「陣オニ」では、「陣」は社会秩序そのものであり、「陣」に触れることは、自分を守ってくれる秩序へのコミットメント(注4)を競争場裡(きょうそうじょうり)で獲得すること、選良(注5)の資格を手にすることである。社会秩序の中心と私的エゴイズムとを結びつけるための単独行的な冒険ということが、「陣オニ」の演習の本義なのだ。

隠れん坊の系譜をはずれた身体ゲームのなかで子どもたちに好まれている遊びは「高(たか)オニ」である。「高オニ」は、土の盛り上がったところ、石段の上部、ブロック塀の上など、オニの立った平面よりもより高い位置に立つことによってオニになることを免れる遊びで、鬼ごっこの一種と考えられる。この遊びの演習課題は、人より高い位置に立つこと、より高みをめざすことがポイントである。

「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」のような戸外の遊びに飽きた子どもたちは、子ども部屋に閉じこもって「人生ゲーム」に興じる。「人生ゲーム」は、周知のように、金を操作することによって人生の階段を上昇することを争うゲームである。ルーレットをまわすたびに金が動く。人生の修羅場をくぐって他人を蹴落(けお)としながら、自動車を買い、会社に入り、結婚し、土地を買い、家を建て、株を売買する。こうして最終的(注6)に獲得した財産の(ウ)タカに応じて、その人の人生の到達度が量られる。成功の頂点は億万長者、ついで社長で、最底辺は浮浪者である。その間に万年課長とか平社員とかレーサーといった地位・職業が位階づけられて

配列されている。

B「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」の行き着く先が「人生ゲーム」といえるのではないか。これらのすべての身体ゲームが共通のコスモロジー(注7)をもっている。それは、私生活主義と競争民主主義に主導された市民社会の模型としてのコスモロジーであり、また、産業社会型の管理社会の透視図法を骨格にもつコスモロジーでもある。これらの身体ゲームを通して、子どもたちは現実の社会への適応訓練をおこない、おとなの人生の写し絵を身体に埋め込むのである。

もとより玩具(がんぐ)産業が次から次へと繰り出して見せる新しいゲームの魅力に子どもたちは抗し難い。ひとり遊びに子どもを引き入れるゲーム・ウォッチ、列強に分かれて太平洋戦争を再演してみせるシミュレーション・ゲームに子どもたちの関心が移れば、「人生ゲーム」は「クラシック」なゲーム、「ダサイ」遊びになってしまう。だが、たび重なるモデル・チェンジにもかかわらず、幻想的に上演されるゲームは、限定された同じコスモロジーを浮かび上がらせる。子どもたちに目先の関心を変えさせ、次から次へと飽きさせることもまたこの商業主義のコスモロジーの特徴である。子どもたちは飽きることの中毒症にかかったようなものだ。しかし、とことんまで飽きたとき、ふと、C飽きることに飽きてしまう一瞬が子どもたちを訪れる。密室で、とにかく他人を打ち負かすありとあらゆるゲームに熱中していた子どもたちが、思い出したように外へ出てくることがある。そのときボールがあれば、三角ベース(注8)やサッカーが始まることもあるだろう。何もなくからだだけあるとき、「陣オニ」や「高オニ」が思い出されるだろう。だが、飽きることの煉獄(れんごく)(注9)から戻ってくるとき、子どもたちは管理社会のコスモロジーそれ自体に飽きているのだ。「陣オニ」や「高オニ」に同構造のコスモロジーを感じ取れば、子どもたちのからだは急速に熱中度を失う。

子どもたちのからだの慣性が、意図しないで管理社会のコスモロジーを引き寄せてしまう。累々たる管理社会のコスモロジーの山だ。だが、その間隙(かんげき)をぬうようにして、同じからだの慣性がもう一つのコスモロジーに出会う場合がある。もう一つのコスモロジーが憑(つ)きやすい遊びは、からだの集まりが相互性を帯びるときに思い出される。かんけりはそのような身体ゲームの一つである。

かんけりはね、かんを思いっきりけっとばすときが気持ちいいんだよ、と小六の男の子はいう。輪の中心に置かれたあきかんに吸い寄せられるようにして、物陰から物陰へと忍び寄っていく。背を見せたオニとの距離を見切ったとき、もうからだは物陰からとび出している。オニが(エ)モウゼンと迫ってくる。オニのからだとほとんど(オ)コウサクするようにしながら、一瞬早くあきかんの横腹を蹴る。あきかんが空中をゆっくり弧を描いてくるりくるりと舞うとき、時よとまれ、とでも叫んでしまいそうな快感が押し寄せ、同時に「私」という名の何ものかが音もなく抜け出していき、とても身軽になったからだだけが残される。もっとも、いつもそんなにうまく蹴れるわけではない。しばしばかんはさわがしい音をたてながら舗道を転がっていったり、二、三メートル先の芝生にぽとんと落ちてとまったりする。それでもかんを蹴った喜びには変りない。

かんを蹴るとき、人は市民社会の「真(しん)の御柱(みはしら)」(注10)を蹴る身ぶりを上演している。輪が市民社会を示すとすれば、かんは秩序の中心であり、管理塔でもある。子どもたちはかんを蹴ることによって、家、学校、塾、地域、社会一般、そして自己内面の管理社会のコスモロジーに蹴りを入れているのだ。

小六の少年はまたいう。かんけりは隠れているとき、とっても幸福なんだよ。なんだか温かい気持ちがする。いつまでも隠れていて、もう絶対に出て来たくなくなるんだ。管理塔からの監視の死角に隠れているとき、一人であっても、あるいは二、三人がいっしょであっても、羊水(注11)に包まれたような安堵(あんど)感が生まれる。いうまでもなくこの「籠り」は、管理社会化した市民社会からのアジール(避難所)創建の身ぶりなのだ。市民社会からの離脱と内閉において、かいこがまゆをつくるように、もう一つのコスモス(注12)が姿を現してくる。それは、胎内空間にも似て、根源的な相互的共同性に充(み)ちたコスモスである。おとなも子どもも、そこで、見失った自分の内なる〈子ども〉、〈無垢(むく)なる子ども〉に再会するのである。

小六の男の子は最後にもう一つつけ加えていう。かんけりは「陣オニ」と違ってほかの人を救おうとするの。自分も救われたいけれど、つかまった仲間を助けなくちゃって、夢中になるのが楽しい。だけどオニは大変だな。オニは気の毒だから何回かかんを蹴られたら交替するんだ。実際、かんけりでは、隠れた者は誰(だれ)もオニに見つかって市民社会に復帰したいとは考えない。運悪く捕(とら)われても、勇者が忽然(こつぜん)と現れて自分を救出してくれることを願っている。D隠れた者が囚(とら)われた友を奪い返して帰って来

ようとするのは、つねにアジールの方、市民社会の制外的領域である。オニが「気の毒」であるのは、オニが最初から市民社会の住人であるかぎり、隠れた者を何人見つけても、そのことで自分が市民社会に復帰するドラマを経験しようがないからである。隠れる者は市民社会では囚われ人以外ではなく、したがって、オニは管理者であることをやめることはできない。

（栗原彬(くりはらあきら)「かんけりの政治学」による）

（注）
1 かんけりは子どもたちに好まれている――この文章は一九八四年に発表された。なお、「かんけり（缶蹴り）」は、隠れん坊の一種。オニが陣地に缶を一個立て、缶を守りながら相手をつかまえる遊び。オニにつかまらないように缶を蹴ると、つかまった仲間を逃がすことができる。
2 藤田省三――思想史家（一九二七～二〇〇三）。
3 呪的な――呪術的な、に同じ。ここでは、超自然的な力が宿っている、の意。
4 コミットメント――関与すること。参加すること。
5 選良――ここでは、エリートのこと。
6 浮浪者――一定の職業および住居をもたない人に対して慣習的に用いられていた言葉。
7 コスモロジー――世界観。宇宙観。
8 三角ベース――少人数で行う、野球を模した遊び。
9 煉獄――ここでは、苦しみを受ける場所のたとえ。
10 「真の御柱」――ここでは、秩序の中心のたとえ。
11 羊水――母胎内で胎児を保護している液体のこと。
12 コスモス――秩序と調和をもつ世界または宇宙。

問1 傍線部(ア)〜(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 〜 5 。

(ア) コウジョウ的 1
① コウレイのもちつき大会を開く
② 社会の進歩にコウケンする
③ 地域シンコウの対策を考える
④ キンコウ状態が破られる
⑤ 病気がショウコウを保つ

(イ) ヘンカン 2
① カンユウをきっぱり断る
② カンダイな処置を期待する
③ 古い美術品の価値をカンテイする
④ 宇宙から無事にキカンする
⑤ 部屋のカンキを心がける

(ウ) タカ 3
① ゴウカな食事を満喫した
② 筋肉に少しずつフカをかける
③ カモクな人が珍しく発言した
④ カモツを載せて走行する
⑤ カブンな賛辞に恐縮する

(エ) モウゼン 4
① 建物がモウカに包まれる
② モウソウにふける傾向がある
③ すべての可能性をモウラする
④ 出場できてホンモウだ
⑤ 体力をショウモウする

(オ) コウサク 5
① サクジツの失敗を反省する
② サクイ的に文章を改変する
③ 冒頭の一文をサクジョする
④ 事典のサクインを活用する
⑤ 試行サクゴを経て成功する

問2　傍線部A「たしかに『複数オニ』や『陣オニ』はおこなわれているけれども、それらはもはや普通の隠れん坊の退屈さを救うためにアクセントをつけた、といったていどのことではない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 「複数オニ」や「陣オニ」は、子どもたちがいくつもの役割を相互に演じ遊ぶ点で、従来の隠れん坊の枠をこえた、人生の行程が凝縮して経験される苛酷な身体ゲームになってしまっているということ。

② 「複数オニ」や「陣オニ」は、オニに捕まった者も助かる契機が与えられている点で、従来の隠れん坊にはなかった、擬似的な死の世界から蘇生する象徴的意味を内包してしまっているということ。

③ 「複数オニ」や「陣オニ」は、オニも隠れた者も仲間のもとに戻ることが想定されていない点で、従来の隠れん坊の本質であった、社会から離脱し復帰する要素を完全に欠いてしまっているということ。

④ 「複数オニ」や「陣オニ」は、子どもたちの自由を制限するさまざまなルールが付加されている点で、従来の隠れん坊とは異質な、管理社会のコスモロジーに主導された遊びに変質してしまっているということ。

⑤ 「複数オニ」や「陣オニ」は、隠れた者も途中でオニに転じることになっている点で、従来の隠れん坊の本義であった、相互の役割を守りつつ競い合う精神からは逸脱してしまっているということ。

問3　傍線部B「『複数オニ』『陣オニ』『高オニ』の行き着く先が『人生ゲーム』といえるのではないか」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」において他者からの不信感を払拭するすべを学ぶことが、金銭によって運営される市民社会を模した「人生ゲーム」へとつながっていくということ。

② 「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」において他者から疎外される寂しさに耐えることが、他人を蹴落とし孤独に対処することが求められる「人生ゲーム」へとつながっていくということ。

③ 「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」において他者と競争してより優位に立つ経験をもつことが、社会的成功を利己的にめざすことを目的とした「人生ゲーム」へとつながっていくということ。

④ 「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」において他者への不安と信頼の間での振る舞い方を身につけることが、より高い地位や職業を得ることをめざす「人生ゲーム」へとつながっていくということ。

⑤ 「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」において他者とともに形成する社会秩序の不安定さを感じとることが、私生活主義を貫くことを必要とする「人生ゲーム」へとつながっていくということ。

問4　傍線部C「飽きることに飽きてしまう一瞬が子どもたちを訪れる」とあるが、ここで子どもたちはどのような状態にあると筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① たび重なるゲームのモデル・チェンジに関心を失った子どもたちは、ふと戸外での遊びを思い出すことによって、管理社会のコスモロジーとは異なるコスモロジーに参入することになる。

② 次々に売り出される室内ゲームに魅力を感じなくなった子どもたちは、管理社会のコスモロジーを他の遊びにも感じ取ったとき、別のコスモロジーに基づいた遊びに向かう可能性を手にすることになる。

③ 玩具産業が提供する室内ゲームにも戸外での遊びにも飽きてしまった子どもたちは、他人を打ち負かすことの繰り返しを自省しはじめ、あらたなコスモロジーを身体性のうちに見いだそうとしている。

④ 商業主義のコスモロジーに気づいた子どもたちは、同時に管理社会のコスモロジーからも離脱していることになるので、あらたなコスモロジーが内包された遊びを楽しめるようになっている。

⑤ 商業主義がもたらす遊びに関心をもてず管理社会のコスモロジーに飽きてしまった子どもたちは、別のコスモロジーに出会ったとしても、もはや遊びへの熱意を失ってしまっている。

問5　傍線部D「隠れた者が囚われた友を奪い返して帰って来ようとするのは、つねにアジールの方、市民社会の制外的領域である」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 隠れた者にとって、かんを蹴って友を助ける行為は仲間を哀れむ思いの高まりの結果であり、共同性を認めない社会から逃れることが、仲間を救う優しさをもち続けることを意味するから。

② 隠れた者にとって、かんを蹴って友を助ける行為はかんを蹴ることそのものに対する喜びに根ざしており、窮屈な市民社会から逃れることが、自己だけでなく他者をも再生できることを意味するから。

③ 隠れた者にとって、かんを蹴って友を助ける行為は心身が汚れていない自己の発見に起因しており、相互的共同性を強いる社会から逃れることが、多様な人生のあり方を見つめ直すことを意味するから。

④ 隠れた者にとって、かんを蹴って友を助ける行為は仲間との連帯感に基づくものであり、競争で相手を蹴落とす社会から逃れることが、安らぎのある共同性のなかに居続けることを意味するから。

⑤ 隠れた者にとって、かんを蹴って友を助ける行為は一人で生きる孤独への不安に由来するものであり、私生活主義を温存する社会から逃れることが、仲間とともにあり続けることを意味するから。

問6　この文章の特徴に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 10 ・ 11 。

① 波線部a「藤田省三」の論は「隠れん坊」に関する研究であり、この文章では同種の研究がいかに数多くなされてきたかを示すために取り上げられている。

② 波線部a「藤田省三」の論は筆者の論とは反対の立場からの考え方であり、この文章では筆者の論に対比される異論や反論の例として取り上げられている。

③ 波線部bのように「小学六年生の男の子から聞いた話」を取り上げているのは、「隠れん坊」や「かんけり」などの本質や特徴を体験談として語らせることで、筆者の論に現実性をもたせるためである。

④ 波線部bのように「小学六年生の男の子から聞いた話」を取り上げているのは、「複数オニ」をよく知っている子どもを登場させることで、大人と子どもの考え方の違いを浮き上がらせるためである。

⑤ この文章は、「隠れん坊」や「かんけり」などの子どもの遊びがもつ本質的な意味や性格を表す比喩として、現代人にとっての「市民社会」や「管理社会」を取り上げている。

⑥ この文章は、「隠れん坊」や「かんけり」などの身近な題材・事実を取り上げることで、その背後にある現代人にとっての「市民社会」や「管理社会」がもつ意味や性格を説明しようとしている。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第2問　次の文章は、加賀乙彦(おとひこ)の小説「雨の庭」の一節である。「彼」の一家は、長年住み慣れた家屋敷を手放して近所の高層住宅に引越しをした。以下の文章は、それから三か月ほど経った六月の雨の日、旧居を訪れた「彼」が、引越しの日に庭で燃やした焚火(たきび)のあとを見ながら追憶にふける場面である。これを読んで、後の問い(**問1～6**)に答えよ。(配点　50)

あらかた荷物の片付けが終ったところで弟がひとつサヨナラ・パーティをやろうじゃないかと提案した。三月半ば、春とはいえ寒波が襲った肌寒い日に一家眷族(けんぞく)、つまり父と母、彼夫婦と息子、弟夫婦に姪(めい)と甥(おい)が八畳間に集った。彼と弟は酔って馬鹿(ばか)陽気に笑いこけた。母は珍しく酒をすごし、息子たちの笑いに誘われて笑っていたのに、ふと顔を曇らせると声をあげて泣きはじめた。びっくりしたのは子供たちである。荷造りのすんだ段ボール箱や食器棚を利用して隠れん坊に興じていた子供たちはおばあちゃまの異変に立ちすくんだ。妙に白けた宴は、妻が気をきかして移り住む先のアパートの美質を、鍵(かぎ)一つで外出できるとか掃除が簡単だとかを語り始めたため再びさんざめいた。**A**<u>そんな一同の動きに終始無縁でいたのは父である</u>。父はみんなの会話からは全く取残され、一人黙々と料理をつついていたが、やがて縁側に立ち水虫の足裏の皮をむしり始めた。そんな父を弟がおひゃらかしたけれど父は動じなかった。耳が遠いからな、きこえんのだよと彼が大声で言っても父は振向きもしなかった。

その時父が何を考えていたかを彼はおぼろげに分るような気がする。父の七十年の全生涯はこの一軒の家で過されたのだ。それが今確実に消えようとしている、その気持を表現するとしたら黙り込む以外にないのかも知れない。

いよいよ当日になった。母に息子をあずけると妻は運送屋の指揮をひきうけた。荷物を選別しトラック内の場所を指定し、大の男たちを意のままに動かす、そんな妻の能力に彼は瞠目(どうもく)した。女たちの有能ぶりと対蹠(たいしょ)的に男たちは無能であった。彼は塵芥(ごみ)を土間に掃きおろしたあとすることが見付からず、庭にぼんやり立っていた父の傍(そば)に並んで立った。いよいよおわりだな、と言うと父は頷(うなず)き、それからあわてて家の中にあがりこんだ。しばらくして父は両腕に電球をかかえて出てきた。父は照れくさそうに、しかし相変らずにこりともせず、これだって残しておくのは惜しいからな、と言った。

庭に集めた塵芥をどうするかで彼は父と争った。どうせ他人に渡すのだからこのまま放置すればと彼が主張すると、きれいに

片付けるのが新所有者への礼儀だと父は反論した。彼が制するのにかまわず父は塵芥(注1)の山に火を付けた。何かの化学製品のせいだろうか、物凄い黒煙が巨大な舌のように吹き出し、前のホテルの窓をなめた。ホテル側も驚いたのだろう、窓の閉まる音がし、支配人が抗議しに来た。恐縮した父は竹箒で火をたたいたり、塵芥の山をかきまわしたりしたが火勢はかえって募った。彼が風呂場に行きバケツに水をくんできた時は黒煙はやみ、通常の焚火となっていた。支配人は火の用心に配慮して欲しいとくどく念を押して帰った。

父と二人で火を燃やした。年の暮れになると焚火をする父を見慣れていたが、こうして彼が父の手助けをするのは幼年時代以降はたえてなかったことだ。B彼は痩せて皺の深い、このところ年々小さくなってきた父の姿が火照った眼蓋の下でゆらめいているのを不思議に親密な思いで見た。

彼の父は或る生命保険会社に三十五年間勤めあげた。几帳面一方の勤めぶりで、しかも会社がおわるとまっすぐ帰宅し、母をして少しは遊んだらいいのにと嘆かしめたほどであった。もっとも模範社員としてなすべきことはしたのであって、つきあいのための麻雀とゴルフなどは十人並にやった。精勤の甲斐あってか五十歳をすぎて取締役となり、本社ビル新築の責任者になった。新しい会社ビルをつくるには先進国の立派な建物を見るにしくはなしというので社用の世界一周をした。(注2)満鉄の株にしてあった財産の大半を戦後に失った父にしてみれば、これは思いがけぬ恩典であった。出発の時の父の得意な顔を彼は忘れない。それは昔、自弁で(注3)ベルリン・オリンピックを見に行った時の若い父の顔を髣髴とさせた。欧米各国の代表的保険会社を訪ね、数百枚のカラー写真をとり、帰国すると本社ビルの設計施工の総監督となり、(注4)盆暮には業者から山なす付け届けをもらい、その威勢はめざましかった。めでたく超モダンなビルが完成した時、父は六十歳の定年に達していた。取締役でもあり、ビル建築の功労者として何らかの特典を期待していた父は、つまるところ一介のやとわれ重役に過ぎず、すなわち何一つ特典のない一社員として退職金をもらい、大学を出てから無欠勤で勤めた会社を去らねばならなかった。

定年退職してから父は暇をもてあますようになった。とにかく何もせず終日家にいる(ア)無聊に耐えられなかったのである。といって老人に適当な勤め口はおいそれとはなく、はじめ元重役であるからには月給十万円以下では(イ)沽券にかかわるといっ

ていた父も、やがて五万円でもいいと言いだし、ついには使ってくれれば給料は問題じゃないと泣き言を並べた。頼むべき知友とすべて会い尽し、あとは為すこともなく、終日家に居るうち父は急速に老けこんできた。八十瓩もあった体重が五十瓩台に下り、体がすぼんだだけ皮膚の皺が増え、煙草を立て続けにのむので持病の喘息は悪化し、のべつ肉を引きちぎるような咳をした。まだそんな年でもあるまいに、あれじゃじじむさすぎる、と家人は話し合った。かつて熱中した麻雀やゴルフをすすめても、それらは会社員という地位に相応しい娯楽なので、失職中の身には何の魅力もなかった。

思えば父には何の趣味もなかった。若い頃には円本(注5)を律義に買い揃え、切手蒐集に精を出し、十六ミリや八ミリの活動撮影に凝った。中年以降は麻雀かゴルフで土日を費やすのが常であった。けれどもこれらの行為は時の流行に従ったのみで、いわば他人の真似であって、他人の消失した今となっては行為の動機が失われたのである。

父が或る小さな水銀灯会社の相談役として就職できた時の嬉しげな様子を彼はよく覚えている。父は若がえったようになった。食も進み適度の威厳を保つほどに肉もついたのである。しかし、十年ほど過ぎたこの頃、父は勤めが辛いとこぼしはじめた。相談役というのは実質的な仕事がなくて退屈であるし、午後になると我慢のならぬほどの睡気がおこり、欠伸の涙眼を若い社員から盗み見されるのが、実に辛いのだという。

彼は弟と相談し、すべての原因は父の老衰にあると結論した。会社をやめさせねばならないけれども、薄給で働くうち以前の退職金はあらかた使い尽していたから、いま住んでいる百坪の土地を売るより仕方がない、彼も弟も両親を養うに足るほどの収入はないからと話し合った。父は息子たちの意見に、お前たちのいいようにしてくれと言った。その困惑し疲労した表情は、小さくて無力な老人のそれであった。

黒ずくめの紳士の一行が来訪したのは、彼が不動産屋に行ってから数日後である。何でも金属問屋の健康保険組合の理事連とかで、理事長とかいう品のよい爺さんが名刺をくれた。突然のこととて洗い髪に白毛の目立つ母は顔を出さず、たまたま家にいた彼が案内役となった。

「木が沢山ありますな」理事長が言った。「この辺では珍しい」

C「子供の時のぼった木です」そう答えると自分の個人的回想が相手には無縁のことと気付き彼は顔をしかめた。

しかし理事長は気さくに微笑した。「そうでしょうな。木というものは生きて愛着がありますからな」

理事長は今度は連れの事務長とかいう中年紳士に「これだけの木は保存したいものだな」と言った。事務長はうやうやしく頭を下げた。

不動産屋から例の健保組合が土地を買いたがっているという電話があったのはその翌日である。彼は会社にいる父にすぐ電話した。父は、「そうか、すぐ帰る」と言った。その声は上擦っていた。まさかこんなに早く土地が売れるとは考えていなかった父は、すっかり周章していたのである。

彼と父は弟を呼んで相談した。彼も父も世間知らずで、相手の金属問屋の組合がどんな団体でどの程度の信用を持つものやら見当もつかなかった。ゴム会社に勤めていた弟は、この点かなり頼りになる筈（はず）であった。期待に答えて弟は相手の組合がいくつかの大銀行に預金を持つ確実な資産の団体であることを調べてくれた上、不動産屋の仲介手数料が売値の三パーセントもあるのは高過ぎるからと不動産屋と渡り合い二パーセントにまけさせてしまった。

売買契約、内入金（うちいれきん）の受渡し、移転登記など、事が始まると事務的な操作があれこれと進み、彼は感傷を覚える暇がなかった。父も同じであったろう。忙しく過しているあいだに引越しの日がいつのまにか到来したという感じであった。

最後の焚火を燃やすことに父は夢中になり、あたりが夕闇（ゆうやみ）に包まれてもやめようとしなかった。新居の片付けを終えた妻が心配して戻ってき、あちらに夕食の仕度ができているという母の言葉を伝えた。もう少しでおわると父は答え、彼が父の答を補強し、もう少しでおわるから先に食事をしていてくれと言った。塵芥を燃やしおえると二人は期せずして積みあげてあったガラクタに手を出した。一種狂暴な衝動が彼におこってきた。どうせ他人に壊されるなら障子や襖（ふすま）や、家の中の燃えるものはみな燃やしてしまいたくなったのである。荒々しく障子をはずし、火に投げこむ彼に対して父は身をよけただけで何も言わなかった。障子は刹那（せつな）に炎上し、中央の硝子（ガラス）は砕け散った。**D**障子をおえて襖に手をかけたとき彼は不意に空（むな）しさを覚えた。電球を取払われた暗い部屋に入ると彼は雨戸を閉め、窓に内側から鍵をかけた。まるで夜休む場合のように戸締りを入念にすると彼は勝手口

から外へ出た。家中でそこだけが外から鍵をかけられる場所だったのである。

雨は燃えさしの墨を流していた。あの夜、暗いままに(ウ)後片付けのはかは行かず、焚火に水をかけると帰ってきた、そのままの姿が雨にたたかれている。彼は自分の荒(すさ)んだ心を剝(む)き出しにされたような気がして眼をそむけた。それだけではない。荒廃し混乱した庭には静けさが微塵(みじん)もなかった。雨に励まされた車の騒音がもろに空気をふるわせ、これも雨の日にかぎって地に這(は)う排気ガスの悪臭があたりに充満していた。追憶にふけっていた彼はそれで目が覚めたように顔をしかめた。高層ビルの新居に移ってから忘れていたこと、いまの大都会で大通りに面した木造家屋がこうむるべき運命的な状況をまざまざと思いだしたからである。家を売ったのは(実際は土地を売ったのだが、彼はどうしても家を売った、と発想してしまう)、父の生活費を出すためだけではなくて、家が事実上住めなくなったからである。

(注) 1 塵芥の山に火を付けた――当時、家庭の廃棄物を個人で焼却することは禁止されていなかった。

2 満鉄――南満州鉄道株式会社の略。一九四五年、日本の敗戦とともに中国に接収された。

3 ベルリン・オリンピック――一九三六年にドイツの首都ベルリンで開催された第十一回オリンピックのこと。

4 盆暮には業者から山なす付け届けをもらい――当時の商慣習として、出入りの業者が便宜をはかってもらおうと、取引先に贈答品を届けるということがあった。

5 円本――大正末から昭和初期にかけて、一冊一円で売り出された全集本。

問1　傍線部(ア)〜(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 〜 14 。

(ア)　無聊に耐えられなかった　12
① 退屈さが我慢できなかった
② 無駄な時間が許せなかった
③ 空虚な心持ちがいやだった
④ 心細さに落ち着きを失った
⑤ 不快感を抑えられなかった

(イ)　沽券にかかわる　13
① 自分の今後の立場が悪くなる
② 自分の守ってきた信念がゆらぐ
③ 自分の体面がそこなわれる
④ 将来の自分の影響力が弱くなる
⑤ 長年の自分の信用が失われる

(ウ)　後片付けのはかは行かず　14
① 後片付けを途中でやめて
② 後片付けをあきらめて
③ 後片付けが手につかず
④ 後片付けに満足できず
⑤ 後片付けが順調に進まず

問2 傍線部**A**「そんな一同の動きに終始無縁でいたのは父である」とあるが、「終始無縁」でいた父の心情について「彼」が想像した内容とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① 父は、七十年の歳月を過ごした家が自分の人生に結びついているので、引越しせず居続けたいと願っている。

② 父は、自分の家への愛着が家族の誰(だれ)よりも深いことに気づき、陽気なパーティーの開催に違和感を感じている。

③ 父は、七十年間を過ごした家がなくなると自分が生きてきたことの証(あかし)も失われるかのように思い、心が沈んでいる。

④ 父は、手放す家のことを考えると感傷的になり、にぎやかな息子夫婦や孫たちの振る舞いを苦々しく思っている。

⑤ 父は、自分の生涯と切り離せない家への思いが深く、その気持ちを家族に話しても理解されないと悲しんでいる。

問3　傍線部B「彼は痩せて皺の深い、このところ年々小さくなってきた父の姿が火照った眼蓋の下でゆらめいているのを不思議に親密な思いで見た」とあるが、「彼」が父に対してそのような思いを抱いたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16 。

① 久しぶりに焚火を手伝っていると、頑固な性格でありながら最後には周囲に合わせざるを得ない弱さをもった父が、なぜか今の自分と二重写しになって見えたから。

② 「彼」の反対にもかかわらず塵芥を焼いて苦情を受けたように、頑(かたく)なために失敗をする父が、老いた今も昔と変わっていないと懐かしく思われたから。

③ 生まじめで近寄りがたい父を手伝った幼いころの焚火の体験が、楽しい思い出として眼前によみがえってきて、年老いた父を意外なほど身近に感じたから。

④ 父が生涯を過ごした家がなくなってしまうと思うと、今さらながら父が気の毒になり、社会的地位や富などを誇りにして生きてきた父への反発が薄らいだから。

⑤ 幼いころのように二人で焚火をするうちに、社会的地位もあり輝いていた父が、失意の時期を経て今は老い衰えていることに気づき、父がいとおしく思われたから。

問4　傍線部C「『子供の時のぼった木です』そう答えると自分の個人的回想が相手には無縁のことと気付き彼は顔をしかめた」とあるが、ここでの「彼」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

① 土地を下見するために訪れた理事長に対し、「彼」は思わず、家への愛着を秘めた樹木の思い出を語ってしまう。それが相手にはかかわりのない話題であることに気づき、自分の言動を苦々しく思っている。

② 見たままの印象を口にしたにすぎない理事長に対し、「彼」は軽率にも、樹木の生い茂った広い庭のある家への愛着を語ってしまう。土地の売買という目的からそれた発言が場の雰囲気を壊すことに気づき、困惑している。

③ 早ばやと現れた買い手に応対した「彼」は、自分の気持ちを整理しきれないまま樹木にまつわる懐かしい思い出を語ってしまう。それが原因で売買に消極的であると誤解されるかもしれないと思い、成りゆきを危惧（きぐ）している。

④ 父母の代理として買い手に応対することになった「彼」は、慣れないやりとりのなかで、つい相手に関係のない樹木についての私的な記憶まで語ってしまう。それでも相手が不快感を示さなかったので、心苦しさを感じている。

⑤ 樹木に関心を示す理事長に好感をもった「彼」は、心を許して少年期から抱いてきた樹木への親密な思いを語ってしまう。それが行き過ぎた振る舞いであったことに気づき、恥ずかしさを感じている。

問5　傍線部D「障子をおえて襖に手をかけたとき彼は不意に空しさを覚えた」とあるが、なぜ「彼」は「空しさを覚えた」のか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18 。

① 感傷的な気分になった「彼」は、他の家族に背を向け父とともに塵芥を焼却していたが、家財を燃やすという行為によって家への愛情を示すことに何の意味も見いだせなくなったから。

② 家財を処分しようとする律儀な父に反対する「彼」は、その一方で、父への同情の心から協力している自分を省みたとき、息子として家を受け継ぎ保持することができない無力さを感じたから。

③ 父と引越し後の片付けをしているうちに、いつしか家財を燃やすことに熱中していた「彼」は、それが家族それぞれが紡いできたこの家の歴史を消滅させることになると気づき、罪悪感を覚えたから。

④ ひたすら家財の焼却を続けた父とは異なり、すべてを破壊したいという衝動から荒々しい行為に及んだ「彼」は、それが家を愛惜する自分のやるせない思いのはけ口にすぎないと気づいたから。

⑤ 新しい所有者への礼儀であるといって家財を処分し、社会的な体裁を取り繕おうとする父を批判する「彼」は、作業を早く終わらせようとして乱暴に振る舞う自分に対して嫌悪感を抱いたから。

問6　この文章における表現の特徴についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 19 ・ 20 。

① この文章は、登場人物である「彼」の視点に寄り添いながらも、必要に応じ周りの人物の視点も取り入れて語られているので、それぞれの人物の心理が分かりやすくなっている。

② 本文中、「実際は土地を売ったのだが、彼はどうしても家を売った、と発想してしまう」の前後に（　）がつけられているのは、土地売買の現実を拒絶しようとする「彼」の思いを読者に説明するためである。

③ 本文の文末表現に着目すると、「のだ」「のである」といった文末がしばしば見られる。これは、主人公の「彼」の判断が客観的に見て妥当であることを示すためである。

④ 本文中の「体がすぼんだだけ皮膚の皺が増え」「のべつ肉を引きちぎるような咳をした」といった表現は、退職後の境遇のなかで急速に老化していった父の様子を効果的に描写している。

⑤ この文章は、雨のなか庭にたたずんでいる時点から引越しの日を振り返り、さらに父の過去や引越しの手続きがあったことを振り返るというように、時間を重層化させた構成になっている。

⑥ 本文の会話表現に着目すると、会話表現であっても「　」がつけられているものと「　」がつけられていないものとがあり、それはどの登場人物が話した会話かによって区別されている。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第3問 次の文章は、『一本菊』の一節である。兵部卿宮は、菊の宴の折、兵衛佐の家にすばらしい菊があることを聞きつけ、その菊を献上させ、その由来を尋ねる。以下の文章は、それに続く場面である。これを読んで、後の問い(**問1〜6**)に答えよ。(配点 50)

兵衛佐、申しけるは、「あれは父右大臣殿、鞍馬(注1)へ参り給ひしに、鞍馬の坊の前栽に、しんくはんもん(注2)の菊とて移し植ゑて候ひしを、わりなく請ひ取りて、家に伝へんとて植ゑ置きしを、父、はかなくなりて後、妹にて候ふ者、父が形見に見んとて惜しみ置きて候ふを、召しに従ひて参らせ(a)候ふ」と申せば、「妹は播磨(注3)の三位の腹、帥の局か」と問はせ給へば、「さは候はず。我と同じき式部卿宮(注4)の腹にて候ふ」と申しければ、宮、思し召しけるは、「いざや、今のもてなしにて、おぼえこそなけれども、院にもこの兵衛佐に並ぶ雲客(注5)もなきものを、まして、女にてかれが妹ならば、いかにいつくしからん(注6)。(ア)あはれ、見ばや」と、深く御心移りて、この兵部卿宮は、当帝の御腹異の御弟、よろづに御情け深く、この兵衛佐をも、常は御目をも掛けさせ給ひてあはれみ給ひける。

この君のこと、夜もすがら思ひ明かし給ひて、宮の御随身、常磐と申して髪容貌足らひて十四、五ばかりにてよろづ物馴れたる童を召して、「あの菊の枝、折りて参れ」と仰せありければ、朝ぼらけの露のしげきに、指貫の裾を取りて、菊を手折りて参りけり。宮、同じ色なる菊重ね(注7)の薄様に、かくなん、

A 「わが心君が籬にうつろふはなほや残せる白菊の花

菊の白露は置き添ふるより苦しきものを」と遊ばし、菊の枝に結びて、「兵衛佐の妹の住むらん方の、格子に挿して帰れ」と仰せありければ、常磐、もとよりこの内の子細、よく知りたる者にて、三条高倉(注8)に行き、この姫君のおはします西の対の、中格子に挿して帰りぬ。女房たち、御格子上げんとて、立ち出で、この花を取り、「これ御覧候へ。花に添へて、(イ)なべてならぬ匂ひの薄様に、歌の書かれて候ふ、御覧ぜよ」とて、兵衛佐に、見せ参らせたりければ、見給ひて、「兵部卿宮の御手なり。こはいか

に。宮の御手にてわたらせ給ふ。(ウ)いかにして思し召し寄りけるぞ。もとより、これこそ、あらまほしきことにてあれ。父母生きておはせば、今までかくてやおはすべき。今は、女御、后の位にもわたらせ給ふべきぞかし。この度、御文あるならば、御返事すすめ給へ。女房たち」とぞのたまひける。また昼ほどに、宮、常磐を御使にて、御文あり。

B 行き通ふ跡は知らねど逢坂(注9)の関は今こそ越えまほしけれ

「この度は、あらはれての御返事を請へ」と仰せありければ、常磐、**b**賜りて、三条へ行き、西の対にて、「これは兵部卿宮の御文よ」と言へば、女房たちは、「いかに。思ひ寄らず。人違へか。とくとく帰り給へ」と、取り入れず。むなしく帰りぬ。押し返しかくなん、

C 紅の末摘花(注10)や我ならんふみかへさるる身こそつらけれ

と遊ばして遣はさるる。常磐、取りて行き、やうやうに言へども、出でず。答へもせず。常磐、幼き心地にねたくおぼえて申すやう、「当時(注11)、我が君の御文なんどをめざましくして、もてなし給ふ便なさよ。取りだに入れさせ給へ」とて、**X**御簾うち上げて投げ入れぬ。されども御返事はなかりけり。その後、色々の薄様に様々の御心をくだきて、押し返し押し返し御文ひまなかりけれども、行く水(注12)に数書く心地して、一度も御返事なかりけり。宮は、「ねたくも言ひけるものかな。よしよし、さらば、さてこそあらめ。とかく言はんほどに、母女御殿の御方へも、聞こえんこそ、恥づかしく思へ」なんど思せども、忘られず、御心弱きにつけても、情けのほどあらはれて、ただ一筋に思すなり。

かくて日数も経るほどに、宮の中、静かによろづものあはれなる昼つ方、常磐、幼き心に、宮の思し召し沈み給へるを、あはれに思ひ参らせ、間近く参りて、「やうやうさてこの御事はしらけて(注13)やませ給ふべきか。常は行きて見るに、かひがひしくとがむべき侍なんども候はず。なかなか御文など候はんよりも、ただ押して入らせ給へかし。しかも今夜は兵衛佐殿、院中の御宿直、殿上に侍るなり。誰が車ともなく、あまた出で入り候へば、うち紛れさせ給ひて、車をば中門に忍び立てさせ給ひて、女房たち、大殿油などひしめき候はん紛れに、西の妻戸(注14)の方より紛れ入らせ給ひて、灯火の白々となりて、よくよく**c**御覧じ候

ひて、御心につかせ給ひ候はば、紛れも入らせ給へかし」。宮は、さもあるべしと思し召して、殿上人(てんじやうびと)のまねびをして、宮の中を忍び出でさせ給ひしかば、常磐、御供申しけり。

（注）
1 鞍馬——京の北方、鞍馬山にある鞍馬寺。「鞍馬の坊」は、鞍馬寺の中の僧の住まい。
2 しんくはんもんの菊——菊の品種の一つ。
3 播磨の三位の腹、帥の局——播磨の三位を母とする帥の局。「播磨の三位」と「帥の局」は、ともに天皇に仕える女房の呼称。
4 式部卿宮の腹——式部卿宮の娘を母としていること。
5 雲客——殿上人の別称。
6 いつくしからん——容姿が端正で美しいだろう。
7 菊重ねの薄様——上が白、下が青の二枚重ねの薄い上質の紙。
8 三条高倉——京の地名。三条大路と高倉小路の交差する辺り。
9 逢坂の関——現在の滋賀県の逢坂山にあった関所。
10 末摘花——紅花(べにばな)の異名。紅、黄紅色の花をつけることから、ここでは「紅の末摘花」で、恋心がはっきり顔色に出ることをいう。
11 当時——現在。
12 行く水に数書く——「行く水に数書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」（『古今和歌集』恋一・詠み人知らず）を踏まえており、苦労しても甲斐(かい)がないことのたとえ。
13 しらけて——気持ちが冷めて。
14 妻戸——建物の四隅にある両開きの板戸。

問1　傍線部(ア)〜(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 21 〜 23 。

(ア)　あはれ、見ばや　21
①　いとしいなあ、会えればいいなあ
②　しみじみと心惹かれるので、会ってみようかしら
③　ああ、会いたいものだ
④　本当に、会えるかもしれない
⑤　かわいそうだなあ、会ってみたらどうだろうか

(イ)　なべてならぬ匂ひ　22
①　並大抵でなくすばらしい色合いや香り
②　全体が一様でない色合いや香り
③　思いがけないほど洗練された香り
④　一般的ではない奇抜な色合い
⑤　一面に広がるほのかな香り

(ウ)　いかにして思し召し寄りけるぞ　23
①　どうにかして妹に近付こうとお思いになったのだな
②　どうやって気のきいた趣向を思いつきなさったのか
③　どれほど妹に対して深く想いをお懸けになっていたことか
④　どのようにして妹に好意をお持ちになるようになったのか
⑤　何としてもご自身の想いを遂げようとお考えになったのだな

問2　波線部a～cの敬語についての説明として正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

① a……兵衛佐から兵部卿宮への敬意を示す謙譲語
b……作者から常磐への敬意を示す尊敬語
c……常磐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語

② a……兵衛佐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語
b……作者から兵部卿宮への敬意を示す謙譲語
c……常磐から兵衛佐の妹への敬意を示す尊敬語

③ a……兵衛佐から式部卿宮への敬意を示す謙譲語
b……常磐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語
c……常磐から兵衛佐への敬意を示す尊敬語

④ a……兵衛佐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語
b……作者から兵部卿宮への敬意を示す謙譲語
c……常磐から兵部卿宮への敬意を示す尊敬語

⑤ a……兵衛佐から兵部卿宮への敬意を示す謙譲語
b……女房たちから常磐への敬意を示す尊敬語
c……常磐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語

問3　A～Cの歌の表現技法とその効果に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

① Aの歌では白菊の花を「君」になぞらえることによって、手折った菊の美しさをまだ見ぬ兵衛佐の妹の容色と重ねて想像する兵部卿宮の心情を表している。

② Aの歌に用いられた「うつろふ」には、兵衛佐の妹に対して兵部卿宮の心が傾くようになることと、白菊の花が色変わりすることとの、両方の意味が重ねられている。

③ Bの歌の「逢坂の関」を「越え」るとは、兵部卿宮が兵衛佐の妹に「逢ふ」ことの比喩(ひゆ)表現で、上の句「行き通ふ跡は知らねど」が「逢(ふ)」を導く序詞(じょことば)となっている。

④ Cの歌の「ふみ」には同音異義語としての「文」と「踏み」とを重ねることによって、二つの意味を織り込む掛詞(かけことば)の技法が用いられている。

⑤ Bの歌とCの歌は、「こそ」を用いた係り結びによって、兵部卿宮の、まだ見ぬ兵衛佐の妹に対する思い、返事を受け取ることができない悲しみの心情が強調されている。

問4　傍線部X「御簾うち上げて投げ入れぬ」とあるが、この時の常磐の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

① 主人の兵部卿宮から何度も兵衛佐の妹の邸（やしき）への使いを命ぜられ、それが無駄足となってしまっているので、わずらわしく感じている。

② 主人の兵部卿宮の手紙を兵衛佐の妹と女房たちが受け取ろうとせず、主人に対し失礼な扱いをするので、いまいましく思っている。

③ 主人の兵部卿宮が兵衛佐の妹に幾度も手紙を出すなど、特別な扱いをするので、兵衛佐の妹に対して激しい嫉妬（しっと）をおぼえている。

④ 主人の兵部卿宮の恋心に気付かない兵衛佐の妹のせいで、主人の期待通りの仲介役を果たせず、自己の立場が悪くなるのではと案じている。

⑤ 主人の兵部卿宮の権威を考えると、宮につれない態度をとっていたら兵衛佐の妹が京にいられなくなるかもしれないと、不憫（ふびん）に感じ心配している。

問5　この文章を通して、兵衛佐の妹に対する兵部卿宮の気持ちはどのように移り変わっているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

① 最初はお気に入りの兵衛佐の妹なら美しいだろうから会ってみたいと執心していたのに、何度も贈った和歌をはねつけられて落胆した。しかし、常磐に兵衛佐の邸に忍び込むように進言されて再び希望を見出した。

② 最初はほんの遊び心で臣下の兵衛佐の妹に会ってみようと思ったが、和歌のやりとりをするうちに本気で兵衛佐の妹を想うようになってきた。そしてついに、兵衛佐が不在の夜に勇んで兵衛佐の邸に忍び込むことにした。

③ 最初は兵衛佐の熱意におされて気乗りのしないまま兵衛佐の妹に会ってみようと思ったが、兵衛佐が妹に詠ませた和歌に心が動いた。そのうえ、常磐に兵衛佐の邸に忍び込んではどうかとそそのかされて興味がいっそうわいてきた。

④ 最初は兵衛佐の妹を垣間見してその美しさに心惹かれ、一途に思い詰めて何度も和歌を贈るが、突き返されて立腹した。そこで、恨み言を直接兵衛佐の妹に言うために、常磐に先導させて兵衛佐の留守中に邸に忍び込もうと考えた。

⑤ 最初は両親を亡くして不遇な兵衛佐の妹に同情して世話をしたいと思ったが、意地悪な返事をもらい、一度はあきらめた。けれども、常磐の勧めにより、直接会って再度自分の気持ちを伝えたいと兵衛佐の邸に忍び込む決意をした。

問6　この文章の内容に合致するものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28 。

① 兵衛佐の妹は、入内して女御や后になるはずだったが、父式部卿宮が亡くなってしまったために叶わなかった。

② 兵衛佐の妹に仕える女房たちは、兵部卿宮に気を遣って妹に取り次ごうとしたけれども、妹は頑なに拒絶した。

③ 兵部卿宮の母親の女御は、宮が兵衛佐の妹に執心し返事も得られずにいる噂を耳にして、とても恥ずかしく思った。

④ 兵部卿宮が献上させた見事な菊は、兵衛佐の父が、早くに亡くなった妻の形見として大切にしていたものだった。

⑤ 兵衛佐は、兵部卿宮が妹に関心をもったのを一家を栄えさせる好機と思い、積極的に妹に宮への返事を勧めた。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第4問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(設問の都合で送り仮名を省いたところがある。)(配点 50)

西(注1)施非能亡呉也。A而後世以亡国之罪帰之西施、過矣。[I] 使呉王不信宰(注2)嚭、殺伍(注3)胥、内修国政、外備敵人、西施一嬪(注4)嬙耳、(ア)何能為。[II] 当時以句(注5)践之堅忍、種・(注6)蠡之陰計、臥薪嘗胆、(イ)日伺其後。[III] 而(ウ)乃遠出数千里、争(注7)長黄池之間、搆(注8)釁艾陵之上、窮(注9)師黷武、(1)殆無寧歳。[IV] 越人乗其空虚而傾其巣穴。[V] 此即無西施、豈有不亡者哉。

吾観呉之亡也、与秦(注10)之苻堅(2)相類。二君荒(注11)淫精明、固不可同年而語。而秦之亡以伐晋致潰、呉之亡以越境而内

救不ルヲ㆑及バ。**B**其ノ轍(てつ)ハ一(いつ)也。然ル後ニ知ル㆓「佳(か)兵(へい)者(は)自(みづか)ラ焚(や)キテ」而「攻ムル㆑遠キヲ者ハ遺(わす)ル㆑近キヲ」㆒、

C(注13)元亀(ぐゑんくゐ)・格言ノ必ズ不ルヲ㆑可カラ㆑易(か)フ也。

（侯方域(こうほういき)『壮悔堂文集(そうかいどうぶんしゅう)』による）

（注）

1 西施――春秋時代、越の国の女性。越王句践(こうせん)の命令によって呉の国に遣わされ、呉王の心を奪った。

2 宰嚭――呉の宰相、伯嚭(はくひ)。

3 伍胥――呉王の臣下で、伯嚭の中傷によって自殺に追い込まれた。伍子胥とも言う。

4 嬪嬙――王に仕える宮女。

5 句践――越の国王。勾践とも書く。

6 種・蠡――文種と范蠡(はんれい)。ともに句践に仕えた人物。

7 争㆓長黄池之間㆒――「争長」とは、他国の諸侯と同盟の代表の座を争うこと。「黄池」は地名。

8 搆㆓釁艾陵之上㆒――「搆釁」とは、釁（いけにえの血を祭器にぬる儀式）を行い戦争を開始すること。「艾陵」は地名。

9 窮㆑師黷㆑武――軍隊を頻繁に出動させ、兵力を濫用する。

10 秦之苻堅――五胡十六国時代、秦（前秦）の王。晋（東晋）を征伐しようとして大敗した。

11 荒淫精明――「荒淫」は酒色におぼれるの意。「精明」は聡明の意。

12 佳兵――優れた兵器。

13 元亀・格言――古くから伝わることばやことわざ。教訓や戒め。

問1　傍線部(1)「寧歳」・(2)「相類」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。
解答番号は 29 ・ 30 。

(1)「寧歳」 29
① 治安が改善された時期
② 平和で戦争のない期間
③ 健康に留意すべき年齢
④ 気候が穏やかな時節
⑤ 兵役が免除された世代

(2)「相類」 30
① ともに協力し合う
② すべてに共通する
③ 互いに似ている
④ 意見を同じくする
⑤ それぞれに欠点がある

問2 傍線部A「而後世以㆓亡国之罪㆒帰㆓之西施㆒過矣」について、(i)書き下し文、(ii)その解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 31 ・ 32 。

(i) 書き下し文 31

① 而(しか)るに後世亡国の罪を以て之(これ)を西施に帰(き)するは、過(あやま)てり。

② 而(しか)して後世亡国の罪を以て之(ここ)に西施を帰(かへ)すも、過(す)ぎたり。

③ 而(しか)して後世亡国の罪を以て之(これ)に西施を帰(とつ)がするは、過(あやま)てり。

④ 而(しか)れども後世亡国の罪を以て之(こ)の西施を帰(き)するは、過(くわ)なり。

⑤ 而(しか)るに後世亡国の罪を以て之(こ)れ西施に帰(かへ)るは、過(す)ぎたり。

(ii) 解釈 32

① とはいえ、のちに呉王が、自分の罪に気がついて西施を越に戻したとしても、遅かったであろう。

② だからこそ、呉が滅んだ後に呉の人々は、呉の国を滅ぼした罪によって西施を責めたのである。

③ そののち、世の人が、呉を滅ぼしたのは越が西施を送り込んだためだ、と言いふらしたのである。

④ にもかかわらず、のちの時代の人が、呉の国が滅んだのを西施のせいにするのは、間違っている。

⑤ しかしながら、そののち越王が、呉の国を滅ぼすために西施を嫁がせたのは、やり過ぎであった。

問3 二重傍線部(ア)「何能為」・(イ)「日伺其後」・(ウ)「遠出数千里」の行為の主体はそれぞれだれか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **33** 。

① (ア) 呉王　(イ) 種・蠡　(ウ) 句践

② (ア) 呉王　(イ) 句践　(ウ) 西施

③ (ア) 西施　(イ) 句践　(ウ) 呉王

④ (ア) 宰嚭　(イ) 呉王　(ウ) 西施

⑤ (ア) 西施　(イ) 宰嚭　(ウ) 呉王

問4　本文の第二段落を五つの文（Ⅰ〜Ⅴ）に分けた場合、それぞれの文の表現と内容の特徴を説明したものとして最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

① Ⅰ「使呉王…」は、仮定の問いかけを用いて、呉の滅亡は呉王にこそ求めるべきであるという従来の見解に対して、疑問を投げかけている。

② Ⅱ「当時以…」は、「臥薪嘗胆」という四字熟語を用いて、越の軍隊を攻撃するために、呉がひそかに力を蓄えていたことを表現している。

③ Ⅲ「而乃遠…」は、呉と越との戦いを具体的に列挙して、両国の攻防が長年にわたって、しばしば繰り返されていたことを印象づけている。

④ Ⅳ「越人乗…」は、呉の首都を「巣穴」に喩（たと）えることによって、呉を滅ぼすことは小動物を捕らえるように容易であったことを示している。

⑤ Ⅴ「此即無…」は、仮定形と反語形を併用することによって、呉の滅亡に対する従来の見解を否定し、筆者自身の意見を強く主張している。

問5　傍線部B「其轍一也」は、ここでは「呉王と苻堅の歩んだ道は同じであった」と解釈できる。この両者についての具体的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 呉王と苻堅とは個人の資質もその結末も全く同じであった。いずれも歓楽にふけって民を顧みず、隣国の攻撃に対する備えを怠ったために滅亡したのである。

② 呉王と苻堅とに個人の資質の上では違いがあっても、二人の結末は全く同じであった。いずれも優れた人物を殺害して政治の方向性を見失ったために滅亡したのである。

③ 呉王と苻堅とはその結末に違いがあっても、個人の資質は全く同じであった。いずれも贅沢（ぜいたく）を好み戦争を好んで、国内の政治をおろそかにしたため滅亡したのである。

④ 呉王と苻堅とは個人の資質もその結末も全く同じであった。いずれも有能な人物を殺害し戦争を好んで他国を侵略し、そこで大敗したために滅亡したのである。

⑤ 呉王と苻堅とに個人の資質の上では違いがあっても、二人の結末は全く同じであった。いずれも他国に遠征して自国の危機に気付かなかったために滅亡したのである。

問6　傍線部C「元亀・格言」を筆者が引用した意図の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36 。

① 呉王の事跡および呉王と苻堅との比較を通じて、呉国の滅亡は、呉王の為政者としての資質にその原因があったことを、教訓や格言を引用して論証しようとしている。

② 呉国の滅亡は、呉王と西施との関係から説明されるものではなく、越王とその臣下らの巧みな策略によるものであることを、教訓や格言を引用して証明しようとしている。

③ 為政者として強大な軍隊を統御し続けることは、個人の資質や時代状況に関係なく、常に困難を極めるということを、教訓や格言を引用して強調しようとしている。

④ 為政者として軍事力を安易に行使すると必ず自滅を招くこととなり、それはまたいつの時代にも繰り返されていることを、教訓や格言を引用して警告しようとしている。

⑤ 呉国の滅亡は、容易には理解できない深遠な理由に基づくものであり、為政者は常にその意味を考えなければならないと、教訓や格言を引用して提言しようとしている。